

繪

943

阿波の鳴戸



金壽堂版
改筆

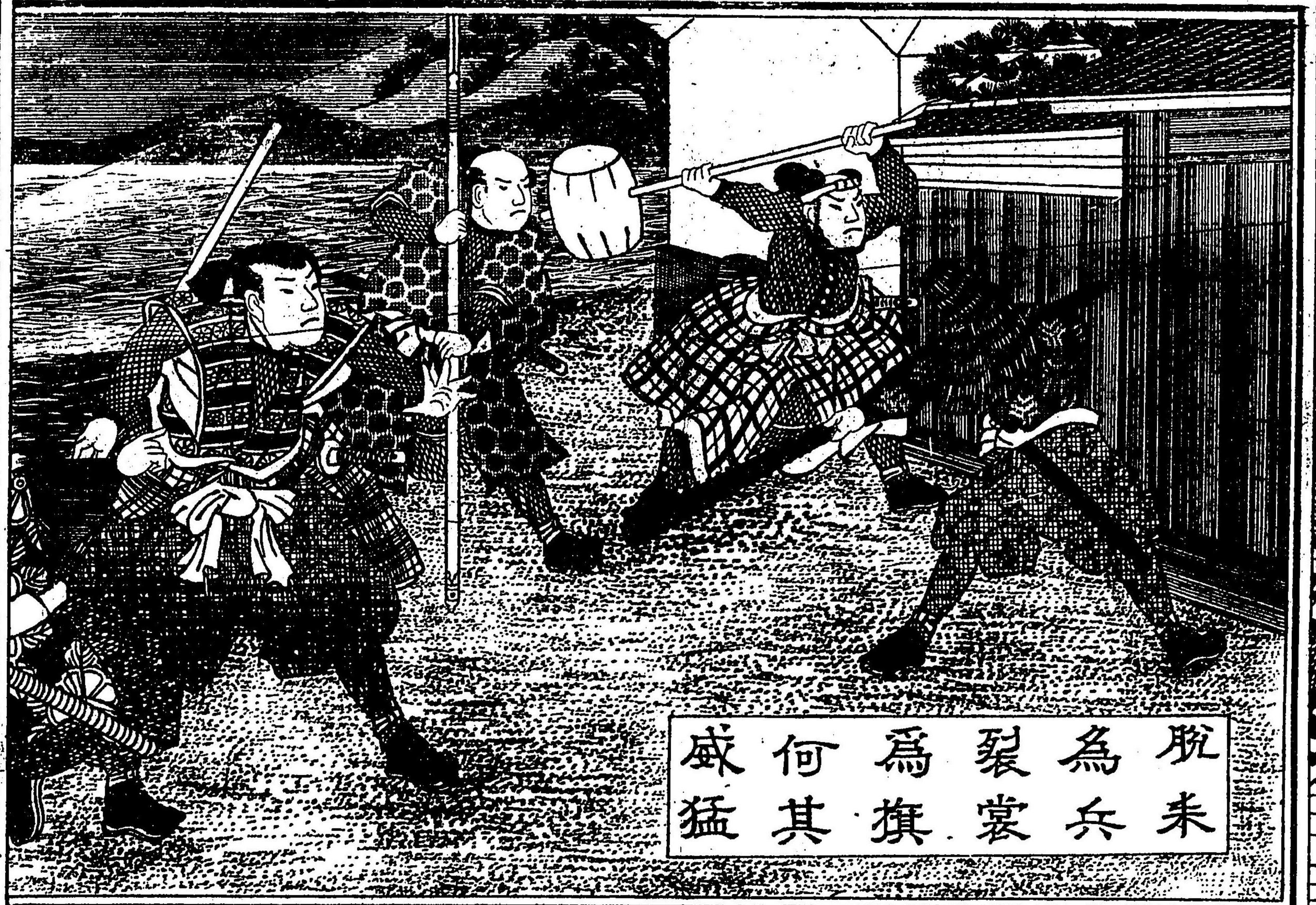


明治十九年九月十七日





鰲身映
人黑
魚眼射
紅紅



脫未
為兵
裂裳
為旗
何其
威猛



鰲身映
人黒
魚眼射
紅紅

十郎兵衛



何其
威猛





十郎五郎
 阿波十郎五郎
 十郎五郎大守小迎ひ
 私ハ永の御
 服と給り
 國と廻
 り御
 叔の詮
 義と
 入り帰国あま
 せハ秋彼の



千巻下巻
 深江屋
 質屋番頭
 種々詮き
 おいと金
 東ふ手
 思ひあ
 家中寄
 心
 折る
 柄室
 御
 玉
 差上る



一
六

六

一
五



十郎兵衛
 何れも
 仰せ
 十郎



左の命
 此方少も
 賊と言ふ
 遠州灘
 彼の衆組
 手まを白
 其室見當
 十郎兵衛



思案ふくんで居り
りけるは或日裏町
あり質見せり刀劍の
流れありと兩傳と求
めて至り
見よ
兼々
千辛
万苦
主家の重宝ありけり
大は悦び價を聞くと二百兩
との事ありけり

十郎共五
調ひり日々
金なきは
立出ける
おろの身は志ざらば
の目ありけり一心寺
詣る一我の家へ急ぎ
立帰らば仏回入り
俱々金の工興
のけり目
身やあれは思ふ
任せぬ事
あやまらば
調ひり日々
金なきは
立出ける
おろの身は志ざらば
の目ありけり一心寺
詣る一我の家へ急ぎ
立帰らば仏回入り



着經
門口え
竹屋
亭王来
先
日此方
の
殿
私
店
の
言れ



一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

十

助く夫の事をも西
故郷へも残せ
近しく進
見
詠
ま
た
名
の
り
此
家
は
置
き
此
終
り
か
方
が
ま
あ
る



さん母さんつりけ有て国を出し
か
と
寄
ら
れ
祖
母
さ
ん
の
養
育
受
け
て
育
ち
が
父
さ
ん
や
母
さ
ん
り
此
世
小
無
事
な
か
れ
あ
ら
う
清
目
よ
り
祖
母
の
言
ひ
を
守
り
ま
す
と
思
ひ
ま
す
と
い
ふ
世
に
は
ま
づ
未
来
の
苦
び
ん
ど
を
お
ろ
の
見
へ
の
顔
の
か
く
り
ま
す
と
い
ふ
ま
が
子
り
あ
ら
う
と
名
の
え
今
に
も
知
れ
ぬ
夫
婦
の
言
ひ
を
守
り
ま
す
と
い
ふ



送り出せ... 別れ... 妾見送り... 帯引... 見失... 是非... 尋ね... 今宵... 首手... 中悪者...

病治り... 傾礼... 借金... 言...



と捕... 我家... 今... 手... 十郎兵衛

手... 口... 咽... 即... 懐... 立...



明治十九年八月廿五日御座
 浅草南元町三番地
 編輯兼出版人 牧金之助

有り事も物々こればかり
 其煩れを我ら娘もよ
 語り合共涙も暮け
 娘が金もて剣を買んとて娘
 の死體とてせんせよ
 一時の気絶と
 見え蘊生してあけし西人
 十郎兵衛

大守へ剣をさし上げる大
 守は深く悦び且長くの辛苦
 と勞ひ酒肴を以て厚く
 とるゝ種々引手物と給
 りの劍と將軍家ま
 上るふ十郎兵衛を罪を免
 りけれん則本領を
 忠勤とてげまか
 家とてさうえける



大守

十郎兵衛

有り事も物々こればかり
 其煩れを我ら娘もよ
 語り合共涙も暮け
 娘が金もて剣を買んとて娘
 の死體とてせんせよ
 一時の気絶と
 見え蘊生してあけし西人
 十郎兵衛

